

氏名	山 口 榮
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1595号
学位授与の日付	平成9年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科産業社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	胡適思想研究 ——人と思想・学問——
論文審査委員	教授 石田 米子 助教授 田熊 文雄 教授 内田 和子 助教授 佐藤 智水 京都大学教授 狭間 直樹

## 学位論文内容の要旨

本論文は、胡適思想の思想史的意義を明らかにするために、原史料にもとづいてその学問方法論、政治・社会・教育思想、禅学研究、水経注研究等の分野にわたり分析を行い、それらの研究を体系的にまとめたものである。史料についてはとりわけ中国の改革開放政策の中での胡適再評価の進展にともない相次いで発刊された『胡適来往書信選』上中下（1983）、『胡適的日記』手稿本（1989）、『胡適遺稿及秘蔵書信』全42冊（1994）等に収められる新出史料をも使用し、従来研究の少なかった分野の実証的研究に特に力を注ぎ、胡適の人と思想・学問の全体像を日本の学界では初めて提示した。

論文は400字にして1055枚に及ぶ大作であるが、以下に各章の概要をまとめて示す。

### 序

胡適と胡適思想の研究は、日本ではまだ文学・禅学などの一部の分野に限られているため、本研究ではその総合的研究を試み、胡適思想の思想史的意義を明らかにするという、胡適に関する研究史をふまえた本論文の意図を示している。

### 第一章 人と生涯

『四十自述』、『胡適留学日記』、『胡適口述自伝』、『胡適的日記手稿本』その他の史料を使用して略伝を述べることを意図した章であるが、五四運動時期までにとどまっており、生涯の伝記としては未完である。しかし、思想形成期の胡適についての詳細な記述がなされており、以下の章の思想の分析・評価にとって必要な部分となっている。

### 第二章 胡適思想の意義

第一節胡適と新文化運動では、胡適は白話運動の口火を切って革新的役割を果たしたがやがて保守反動化したとの従来の評価に対し、新文化運動の中で「科学」と「民主」を唱え、科学救国、教育救国論を以て活動を続け、科学的治学方法の鼓吹と実践に努めたことを明らかにした。第二節胡適の西化論では、胡適が阿片戦争以後の中西文化問題論争にお

いて生涯を通じて西化論を唱えたことを取上げ、その「全盤西化」論に分析を加え、従来の評価を批判し最近の再評価に論及している。この章は、主として従来の胡適思想評価問題の主要な論点を挙げ、その批判を展開した部分である。

### 第三章 胡適の学術思想

第一節においては胡適の所謂科学的治学方法によって得られた儒教観を示し、胡適が儒教の特色についてヒューマニズム、合理主義、自由と民主の精神を後世に残したと説いたことを明らかにし、第二節では胡適の科学的方法は「大胆的仮設、小心的求証（大胆な仮設と慎重な実証）」を以て表され、プラグマティズムの方法と清朝考証学の方法を勘案して成立したものであること、第三節では胡適の科学的方法・思想がダーウィンの進化論の影響を大きく受けていることを明らかにしている。胡適の学問方法論の分析と評価がこの章の課題となっている。

### 第四章 胡適の政治・社会思想

第一節では、胡適の政治思想をその生涯の各時期に区分し、時期ごとにその特色を明らかにし、変化する政治思想が「一点一滴（わずかずつ）」の改革、各人の「鑄造成器（人間の育成）」を説くことにおいて一貫していることを示した。第二節は、1950年代半ばの中国における胡適思想批判運動の際に問題とされた胡適の社会思想批判のいくつかの論点を中心に、原史料に即して胡適の所説を紹介し、批判の論点に対する見解を明らかにした。

### 第五章 胡適の教育思想

第一節胡適の教育論では、胡適が梁啓超の新民説の影響を強く受け、教育の普及と向上及び女子教育の重要性を説いたことを明らかにし、第二節胡適の教育活動では、従来哲學家を以て自認し、教育家としては知られてこなかった胡適の、教育者としての活動と教育思想を研究対象に取上げた。

以上第三、四、五章では、胡適が活躍した時代の中で、彼が救国という問題の根本的解決の為には国を救うこと、社会を救うことよりも個人を救うことが先決であり、個人が正しい思考方法・学問方法を身につけて社会のために有用な人材となることが国が亡びない為の保障となるとし、個人尊重のリベラリストとして孤高を保ったことを強調している。

### 第六章 胡適の禅学研究

胡適は自らの本業は哲学研究であると言っているが、その禅学研究は胡適の中国哲学史研究の一環をなすものである。1926年渡欧の際、ロンドン大英博物館、パリ国立図書館所蔵の敦煌文書の中に中国初期禅学関係の新史料である神會語録等を発見し、水経注研究とともに禅学研究は胡適晩年の重要な学術研究となった。本章ではその経緯と研究内容について論述し、胡適が科学的治学方法として禅家の方法に注目していたことを明らかにしている。

### 第七章 胡適の水経注研究

胡適の水経注研究は、胡適が駐米大使解任後に始めた重要な学術研究で、胡適晩年の最も重要な研究活動である。第一節では、胡適の水経注研究が、単に戴震が剽窃の疑いをかけられた所謂水経注疑案に対し、胡適が清朝考証学者中の希有の人物とみなす戴震の為にその無実を論証しようとする動機に発したことにとどまらず、正しい校勘学の方法を示し科学的治学方法を実践するという動機によるものであったことを、『胡適遺稿』等から明らかにした。第二節では近年発表された水経注研究遺稿とその版本考証の動向を詳細に紹

介し、第三節では胡適が校勘のためにどれほどの情熱を注いだかを、古本の搜集の努力と実際の校勘の実例を示しつつ明らかにした。第四節では、胡適の水経注研究の1950年代の評価と胡適再評価後の評価を紹介しつつ、未完に終わった胡適の水経注研究の学問方法上の意義を論じた。この章は本論文中でも特に完成度の高い優れた部分である。

#### 結び

学位論文申請者が学生時代以来、中断の時期はあっても40年近く胡適とその思想を研究し、最近の新史料とそれにもとづく内外の新しい研究にも広くあたりながら本研究をまとめたことを述べ、各章で分析し明らかにしたことの中に一貫する胡適の人と学問・思想の特徴を示した。それは生涯を通して五四運動時期の「科学」と「民主」を唱え、事実を重んずる思考方法を提唱し、「科学的治学方法」の提唱と実践を貫いたことであると、従来の胡適の思想の変化・保守化を問題にする研究に対し、重視されるべき一貫性の内容を総括的に提示した。

### 論文審査結果の要旨

審査委員会は、学外からの招聘審査委員を含む5名で構成し、審査に当たった。長大でかつ内容多岐にわたる論文を詳細に審査した結果、審査委員が共通して評価した点は以下のことである。

- 1) 胡適研究史、とりわけその思想・学問の研究史の中で本論文を見る時、とりわけ日本では個別の研究でも体系的な研究でも先行研究に見るべきものが未だない状況において、本論文が膨大な史料にもとづいて伝記、新文化運動と中西文化問題に関する思想、学問方法論、政治・社会・教育思想、禅学及び水経注の研究とその方法等、広い分野にわたる長年の自らの研究の蓄積をまとめたことの意義は大きい。
- 2) 史料と内外の研究はよく集められており、史料はよく読みこなされ、個々の問題について実証的に分析されている。最近の胡適再評価の時流に単に同調したのではなく、長年の「实事求是」の方法による研究で従来の固定化された胡適評価を覆したことは、独自の成果として評価される。
- 3) 論点が各章・節で明確にされており、最終的に一貫する思想と思考方法・学問方法の特徴が明示され、胡適の人と思想・学問の全体が展望できる。

一方、詳細にわたる審査の中で指摘された問題点も少なからずあったが、全体にわたる主な問題は次のことである。

論文の各章は、独立させても1編の論文のテーマとなりうる問題を扱っており、その上胡適の主張自体が時代と論争の局面で変化している。それらの問題を個々に丁寧に実証的に扱っている点は評価されるが、一方、各章の論点の胡適思想の形成・展開における関連や矛盾・変化の分析をさらに深め、一つの論文としての整合性・体系性を一層追究する課題がなお残っている。具体的にはたとえば胡適の西化論の分析に関して、審査委員から意見が出された。

また、胡適の中国思想史上の位置づけに関しては、今後研究の視野をさらに広げ、他の思想家の思想との関連の具体的な研究をふまえて考察するという課題がある。

伝記的手法はとられていないものの、第一章の伝記部分はもし記述するなら五四時期までにとどまるべきでないとの批判もあった。

その他、個々の評価の問題、概念・用語の問題、細かい誤記・誤植等についても、各審査委員から詳細・多岐にわたり意見と助言が出された。

以上を総合的に判断し、審査委員会は、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。